

3/30 2005



Japanese Music Education Society **News Letter**

第 19 号

No.19

日本音楽教育学会 ニュースレター

目 次

会長退任のご挨拶 .....	2
書評 .....	5
平成 16 年度第 4 回常任理事会報告 .....	6
住所・所属変更及び新入会員住所 .....,.....	10
Letter to the editor .....	12
日本音楽教育学会第 8 回音楽教育ゼミナール"2005" .....	14
事務局からのお知らせ／編集後記 .....	15

# 会長退任のご挨拶

## 選挙公約（マニフェスト）と三年間の自己評価

日本音楽教育学会 会長  
村尾忠廣



この3月に会長としての任期を終えることになりました。少しほっとしています。

振り返ってみますと、4年前の2001年に会長の「立候補・推薦による直接選挙」が導入され、私は公約を掲げて立候補いたしました。理事だけで会長選挙をおこなっていた時には、水面下で多数派工作がおこなわれ、それが後の学会運営にまでしこりを残していたように思います。ですから、誰が候補になっているか、どういう学会運営を目指そうとしているかということを中心に事前に情報公開し、その上で全会員による直接選挙としたのでした。

残念ながら私以外に立候補者がなく、実質、信任投票的なことになってしまいました。しかし、私は学会運営に関する所信を具体的に表明し、公約（マニフェスト）のようなものを掲げて立候補しています。任期を終えるあたり、この公約に関してどの程度のことのできたのか自己評価をおこない、それでもって会長退任のご挨拶に代えさせていただきたいと思います。

### 1) 実践的研究へとウィングを拡大すること。

これについては90点いただけるほど公約をはたせたのではないかと自己評価しております。公約を具現するために、「二種類の学会誌刊行に関する検討委員会」（坪能委員長）を発足させ、その答申を受けて、従来の研究誌に加え、新たに「音楽

教育実践ジャーナル」を刊行いたしました。当初、「実践的ジャーナル」を刊行することには反対意見もありましたし、それゆえ、総会ではどうなるか危ぶまれるような場面もあったのですが、結果的に新学会誌は非常に好評で、学会活動全体を活性化することに繋がったように思います。「実践ジャーナル」刊行ということ以外にも、大会でのワークショップ（金城大会）、くらしきゼミナールでのワークショップ、そして新たに夏期ワークショップを開催するようにしたこと――いずれも「研究をベースにした実践への関わり」という意味において学会はその活動のウィングを拡げました。非常に大きな改革であっただけに、今その経過を振り返りながら安堵しております。

### 2) 学会の国際化を図ること。

会長に就任早々、韓国音楽教育学会（Korea Music Educators Society）と日本音楽教育学会で姉妹学会協定（Academic Agreement between Korea Music）の話をすすめ、2002年の全国大会（名古屋、金城大会）には Whang 会長と Choi 事務局長を招聘、2003年には私と筒石事務局長が韓国を訪問してそれぞれ協定に調印いたしました。大会においても、2002年の名古屋、金城大会では田中健次氏の企画によるアジア地域の音楽教育のラウンドテーブル、2003年神戸大会では安田寛氏によるアジア太平洋地域のラウンドテーブル、

2004年の武蔵野大会ではK.スワニク教授の特別講演――というように、毎回海外から研究者を招いた企画がおこなわれました。また、ニュースレターでは毎号、なんらかの国際ニュース、国際学会の報告がおこなわれています。この三年の間に学会の国際化は急速に進展していったと言ってもよいでしょう。自己評価で甘いかもしれませんが、この公約もまた90点はいただけるのではと思っております。

3) 情報弱者に配慮しながら情報化を推進するということ。

この公約については、北山敦康氏(事務局引き継ぎ)にホームページ担当委員を委嘱し、氏のお骨折りのもとでホームページやニュースレターを充実させることができた、と思っております。入会手続き、学会費や大会参加費などの納入、その他ニュースレターの電子配付や電子会議など進めようと思えば不可能ではないことも多々ありましたが、公約では情報技術の進展についてゆけない、ゆこうとしない多くの会員がいることを配慮する、ということをお勧めしておりました。ですから、他の学会より遅れている、という批判を受けることも承知でゆっくりと情報化を進めたつもりでいます。もちろん、情報化の流れにそって学会をより迅速に、しかも活気あるものにしたい、という要望があることも承知しておりました。ですから、ホームページに学会掲示板くらいはつくって自由闊達な意見を交す場所を提供したい、と思っていたのです。ただし、非常に残念ながら、ちょうどそのように考えていた時に学会執行部を個人的に糾弾する匿名の電子メールが配送される事件がおきてしまいました。批判の内容が仮にどのように正しくとも文書の責任の所在を明らかにしない個人攻撃は犯罪に近いものです。学会掲示板の構想は、こうした無

責任な書き込みへの対応が保証できない以上、断念せざるをえません。会長になりますと、いろいろな人からさまざまな電子メールが飛び込んできます。逐一返答するのは大変ですが、しかし、送り手の責任が明記していれば対応してきたつもりです。実際、書き手の責任を明記しているものは、学会運営上の批判であっても多くの場合有益でした。それだけに学会掲示板をつくることができなかつたのは実に残念であります。この点での公約は、情報化は慎重に推進するという断りがあったということで70点くらいでしょうか。

4) 情報公開と情報の交流。

ニュースレターを創刊した当時は、会員からの自由投稿による情報発信を交えた面白い情報誌を想定していました。しかし、前述のような問題がおきたこと、また、ニュースレター編集が毎回交代して年間を通じた企画・編集ということがおこなわれなかつた、ということなど、いくつかの理由から情報の交流的公開は前進できなかつたように思います。また、理事会からの情報公開にしても、公開を決めたものの、それには会則の変更が必要なことがわかって撤回を余儀なくされたこともありました。ですから、具体的に何を改革できたか、という点では形のある成果を示すことができません。しかし、理事会、各種大会、委員会などすべてにわたって自由な空気、民主的な討論、決議というような雰囲気は進行してきたと確信しております。私自身は、この点についてもそれなりに満足できるものと思っておりますが、具体的な成果に乏しいという意味で自己採点は60点くらいでしょうか。

5) 他学会との相対評価。

在任中に、会員から学会運営上のさまざまな指摘を受けました。中でも、昨年おこなわれた選挙の実施に関する指摘は有益

であり、会則上の問題を見直す機会ともなりました。そういうことを振り返ってみますと、たしかにいろいろ問題を抱えているものの、他の幾つかの音楽関係の学会と比較して考えてみた場合、日本音楽教育学会は何と民主的に成熟してきたものかと感慨深くなってしまいます。たまたま私が所属している音楽関係の他の学会は、実質の会長選挙というのに選挙管理委員会も立ち会い開票もなく、電子メールの受信箱が全てです。そうして選ばれた会長候補者が理事候補を選ぶ、という前近代的なことをしています。また、いくつかの学会では、学会の代表の選出の方法も任期も規定されておらず、代表の交代もないとか。ISMEが新たに導入した全会員による電子投票はずいぶんしっかりした投票ソフトプログラムを作成しておこなったものの、肝心の選挙管理委員会が機能していません。日本音楽教育学会の場合、たしかに、候補者が一名の場合、一人もいなかった場合、三名以上であった場合、過半数の解釈――それぞれについての選挙（投票）規定を細かく規定しておく必要がありました。しかし、そういう問題が指摘され、議論される学会こそ

が本来の学会なのでしょう。そういう意味で私は、日本音楽教育学会で会長を務めさせていただいたことを大変誇りに思っております。

さて、四月から坪能新会長を中心とする新執行部が発足します。坪能さんは、副会長として、そして学会誌編集委員として、さらには昨年の全国（武蔵野）大会実行委員長として文字通り学会の大黒柱として私の目指す方向を支え、推進していただきました。今度は、みんなで坪能新会長を支える番です。日本音楽教育学会は、坪能新会長のもとに新たな発展の1ページを切り開いてゆくことになるでしょう。

最後になりましたが、平井副会長、筒石（前）事務局長、北山事務局長をはじめ、常任理事、理事のみなさま、各種委員会、大会実行委員長、委員のみなさま、そしてなにより陰に陽に私を激励してくださった会員一人ひとりのみなさまに深く感謝したいと思います。本当に有り難うございました。これをもって退任のご挨拶に代えさせていただきます。

---

## 第36回全国大会（沖縄大会）のお知らせ

日時：平成17年10月29日（土）30日（日）

場所：琉球大学（法文学部新棟）

詳細は次号でお知らせいたします。

---

## 書評

R.コールウェル, C.リチャードソン編 (2002)  
『音楽教授と学習のニューハンドブック』  
オックスフォード大学出版会  
ISBN 0-19-513884-8



イリノイ大学名誉教授で「BCRME:音楽教育研究協議会報」の創立者でもあるアメリカ音楽教育界の重鎮 R.コールウェルとミシガン大学助教授で音楽教育の学科長を務める C.リチャードソンが編集した音楽教育の新たなハンドブックである。

このハンドブックは MENC「全米音楽教育者会議」により、1995年に企画され2002年に出版されたものである。本著はアメリカを初めとする世界的な研究者113名が執筆し、1248頁にも及ぶものであり、英語圏の音楽教育の21世紀の研究動向を学ぶには最適の「ハンドブック」(論文集)である。著者の中には、我が国でもおなじみの美学・哲学の R.スミス, E.ヨーゲンセン, 心理学の R.E.ラドシー, D.ハーグリーブス, 教育学の K.スワニック, L.ブレスラー, 多文化教育の B.R.リンドクイスト, 歴史学の M.L.マーク, 評価の R.コールウェル等が含まれており、それぞれの論文がコンパクトにまとめられ、テーマごとに編集されているので、音楽教育学の専門的な動向を知ると共に、大学のゼミ等で英語による論文等の書き方を指導する際にも良いレファレンスとなっている。

内容は、現在の音楽学習や教授に関わる適切な研究のコレクションと銘打っているだけあって、多岐にわたっている、10部構成で、①音楽教育のポリシーと哲学、②教育内容とカリキュラム、③音楽発達と学習、④音楽認知と発達、⑤社会的文化的コンテクスト、⑥音楽教師教育、⑦音楽教育

コネクション、⑧脳科学、医学、そして音楽、⑨一般教育の産物、⑩音楽教育研究デザイン、批評、評価となっている。

旧バージョンとの比較とその期間の米国の研究の変遷については興味深いものがある。前書『音楽教授学習の研究ハンドブック』は1992年にMENCによって出版され、出版時には「幅広く複雑な音楽教育のフィールドに明確さと統一を提供するのに役立つ」と歓迎された。新版は、再びMENCがスポンサーとして携わり、初版以来の約10年間に起こった音楽や芸術教育上の意義深い変化に対して単なる改訂版ではなく新たに書き下ろし、発展的に記述したことがあげられる。特に多文化音楽教育、ジェンダー、音楽教育に関わる音楽以外の成果にも光が当てられている。その他音楽家の健康や、教師教育、音楽教育プログラムの評価を維持するための実践的な情報、音楽認知、研究理論、カリキュラム、音楽性に関わる哲学的な論点も展開されている。

このハンドブックは、アメリカ音楽教育研究に携わる者だけではなく、音楽教育の国際的な研究動向を探る書として、研究者、音楽教師、学生(院生)にとっても、かけがえのない参考文献となりうるだろう。論文だけではなく巻末のインデックスを整理するだけでも、音楽教育の基本的な概念理解の入門になり、図書館、研究室にも常備しておきたい書の一つである。

(東京学芸大学 筒石賢昭)

# 平成 16 年度第 4 回常任理事会報告

日時：平成 17 年 2 月 20 日（日）13:00～17:00

場所：東京芸術大学音楽教育研究室

出席：今川，岩井，岩崎，加藤，北山，小山，阪井，杉江，筒石，坪能，平井，藤沢，  
降矢，村尾（五十音順）

欠席：奥，佐野，重嶋，島崎，丸山（同）

平成 16 年度第 4 回常任理事会は，次期常任理事会との引き継ぎ会議を兼ねて行われました。

## 【報告事項】

### 1. 音楽教育事典について

・坪能副会長より，音楽教育事典の販売状況について，初版 300 部，増刷 200 部の計 500 部を完売したとの報告があった。音楽之友社にはさらに 200 部（最低単位）の重刷の希望を伝えることとしたが，決定は同社の営業判断に委ねることになる。

・現在音楽之友社で保管している原稿を廃棄処分する方針であることを著者に葉書で伝え，原稿の返却を希望する場合は事務局に連絡してもらうこととした。

・連絡が取れずに原稿料が未払いになっている 8 名の非会員の方の扱いについては，村尾会長の責任で調査をし，迅速に処理することとした。

### 2. 音楽教育ゼミナールの補助金について

・これまで音楽教育ゼミナールの運営に対しては，学会本部から 40 万円を貸し付けて後日同額を返却してもらうというやり方であったが，今後は貸付ではなく補助金（基本的に返却を義務づけない）として 40 万円を音楽教育ゼミナール実行委員会に委託することとした。

### 3. 第 35 回全国大会（武蔵野音楽大学）について

・坪能大会実行委員長から，第 35 回全国大会（武蔵野音楽大学）の会計報告があった。現在 762,599 円の残金があるが，うち 358,933 円を「未払い金」として実行委員会で保留し，残りの金額を学会本部に寄付する方針である旨の報告があった。

### 4. 委員会報告

#### 1) RILM

・RILM 担当の今川理事より，現在文献目録を国際版の編集に送るための作業中であるとの報告があった。また，これから目録を国内の選定にまわすので，業績の積極的申告を会員に期待したいとのことであった。

・村尾会長から，日本音楽学会等に呼びかけて補助金を出す学会を増やす方向で運動している旨の報告があった。また，現在は CDROM 化の方向であるため，今後はウェブで情報を公開できるように提案をしているものの，人件費等の問題で進まないのが当面は書籍の形で行かざるを得ない状況であるとの説明があった。

#### 2) 編集委員会

・坪能副会長から，3 月末発行予定の「音楽教育実践ジャーナル」の編集が進行中であり，次号の特集は「鑑賞」であるとの報告があった。

### 5. 新役員について

・小山次期事務局長から新役員についての報告があった。

新役員（任期3年：平成17年4月1日～平成20年3月31日）

役職名	担当	氏名	所属
会長		坪能由紀子	日本女子大学
副会長		岩崎 洋一	福岡教育大学
副会長		加藤富美子	東京学芸大学
事務局長		小山 真紀	立教大学
常任理事	総務	佐野 靖	東京芸術大学
常任理事	総務	村尾 忠廣	愛知教育大学
常任理事	企画	阪井 恵	明星大学
常任理事	企画	島崎 篤子	岩手大学
常任理事	企画・東北地区代表	降矢美彌子	宮城教育大学
常任理事	会計	今川 恭子	立教女学院短期大学
常任理事	会計	奥 忍	岡山大学
常任理事	編集委員	岩井 正浩	神戸大学
地区代表理事	北海道	寺田 貴雄	北海道教育大学
地区代表理事	関東	宮野モモ子	千葉大学
理事	関東	井口 太	東京学芸大学
理事	関東	熊木眞美子	筑波大学附属小学校
理事	関東	山本 文茂	東京芸術大学
地区代表理事	北陸	小川 昌文	上越教育大学
理事	北陸	篠原 秀夫	金沢大学
地区代表理事	東海	南 曜子	金城学院大学
地区代表理事	近畿	安田 寛	奈良教育大学
理事	近畿	嶋田 由美	和歌山大学
理事	近畿	若尾 裕	神戸大学
地区代表理事	中国	小川 容子	鳥取大学
地区代表理事	四国	田邊 隆	愛媛大学
地区代表理事	九州	木村 次宏	福岡教育大学
会計監事		伊藤 誠	埼玉大学
会計監事		杉江 淑子	滋賀大学

## 6. 平成 17 年度事業計画について

- ・小山次期事務局長から平成 17 年度事業計画についての報告があった。

平成 17 年

- 4 月 22 日 共同企画発表締切
- 5 月 15 日 平成 16 年度会計監査
- 〃 平成 17 年度第 1 回編集委員会
- 〃 平成 17 年度第 1 回常任理事会
- 〃 平成 17 年度第 1 回理事会

6 月中旬 学会誌第 35-1 号・ニュースレター No.20 発行

6 月 22 日 口頭発表（個人，共同研究）締切

7 月 10 日 第 2 回常任理事会

8 月下旬 音楽教育実践ジャーナルVol3.No.1  
・ニュースレターNo.21 発行

9 月 9 日～11 日

第 8 回音楽教育ゼミナール・イン妙高

10 月 28 日 第 3 回編集委員会

〃 第 3 回常任理事会

〃 第 2 回理事会

10 月 29 日・30 日

第 36 回大会 会場：琉球大学

12 月中旬 学会誌第 35-2 号・ニュースレター No.22 発行

平成 18 年

2 月初旬 第 4 回編集委員会

平成 17 年度第 4 回常任理事会

3 月末日 音楽教育実践ジャーナルVol.3.No.2  
・ニュースレターNo.23 発行  
平成 17 年度会計決算

## 7. その他

- ・北山事務局長より会員からの抗議文について報告があり，3 月末発行のニュースレターに掲載する方向であることの説明があった。

### 【協議事項】

#### 1. 音楽教育ゼミナール・妙高について

- ・坪能次期会長より，伊野音楽教育ゼミナール実行委員長からのメールによる進捗状況の報告があった。会場は宿泊先となる「ホテル大丸」の他「妙高高原メッセ」等の施設を使用して，ヨーゲンセン氏をはじめとする海外からのゲストを迎えて 100 人くらいの規模で開催する計画

であることなどが紹介された。

- ・今回のゼミナールの開催日程について，沖縄大会との時期的問題があるのではないかと意見が出され，坪能次期会長から伊野音楽教育ゼミナール実行委員長に参加者募集に対する危惧の意見があったことを伝えるとともに，次期理事会としても広告主についての情報等の協力をすることが確認された。

- ・杉江会計担当理事からこれ以後の音楽教育ゼミナールについてもゼミナール実行委員会の予算の中に報告書の作成費用を入れることを原則としてはどうかとの提案があったが，検討の結果，これについてはケースバイケースで柔軟に行うこととした。

#### 2. 第 36 回全国大会（琉球大学）について

- ・坪能次期会長より，大会実行委員会からのメールによる進捗状況の報告があった。

- ・北山事務局長より，3 月末発行のニュースレターで第 36 回全国大会の時期と場所を記載した囲み記事を掲載する方向であるとの報告があった。

- ・加藤企画担当理事から，研究発表の募集に関するチラシを同封することになっている旨の報告があった。また，新入会員であっても研究発表応募締切日までに当該年度の会費を納入していれば研究発表に応募できるということを大会研究発表応募要領に明記することが確認された。

#### 3. 第 37 回全国大会の開催地について

- ・弘前大学から全国大会開催候補地から外してほしいとの連絡があったことが報告され，村尾会長からこの間の経過についての説明があった。

#### 4. 第 36 回全国大会でのプロジェクト研究について

- ・加藤企画担当理事より，村尾会長から



の提案（「音楽科におけるくゆとりの教育」は子どもたちに何をもたらしたのか～学習指導要領における教育内容の削減と実質的増大という矛盾の中で音楽科における「学力低下の問題」を検証する）が紹介され、坪能次期会長から、この提案を5月に予定されている新年度の理事会で「常任理事会企画」として検討する方向であることが報告された。

・プロジェクト研究の趣旨が会員に十分浸透していないと思われるので、加藤企画担当理事が3月末発行のニュースレターでその趣旨についての記事を執筆することになった。

・今後、理事会はその次の年度の提案をするということが確認され、基本的には2年連続するなりの長期的視野をもって考える必要があるのではないかと意見が出された。

#### 5. 事務局体制について

・坪能次期会長から事務局体制の再検討を学会運営検討委員会に諮問したいとの提案があり、これが承認された。

・事務局より学会誌のバックナンバーの在庫処理について提案があり、検討の結果、3年以上経過したもので100冊を超える在庫についてはこれを破棄することとなった。なお、古い名簿もこれに準じて処分することになったが、個人情報の保護については十分な対策をとることが確認された。

#### 6. 常任理事会と理事会の持ち方について

・理事会と常任理事会との報告事項等の重複を避けるため、今後は必要に応じて理事会と常任理事会を同時に進行するなど、会合の持ち方を工夫することにした。なお、その場合も理事会と常任理事会の機能や役割が曖昧にならないようにすることが確認された。

・小山次期事務局長より提案があり、今後は理事会、常任理事会、総会等の議事録の作成を各理事がローテーションで担当することになった。

#### 7. 新発足の委員会等について

・坪能次期会長より来年度から国際交流委員会（前回の理事会で奥理事から提案があった）、学会運営検討委員会（選挙、事務局運営、会則等を検討する）、編集委員検討委員会（人数や分担等を検討する）を発足させたい旨の提案があり、5月に予定されている新年度の理事会で具体的な委員の人選等を検討することになった。

・総務担当理事（村尾・佐野）と副会長（岩崎・加藤）の4名がニュースレターの編集にあたることが確認された。

・ホームページ担当については、坪能次期会長から適任者に依頼することになった。

・その他、申し送り事項の確認が行われた。

#### 8. 新編集委員について

・村尾会長から編集委員会交代人事についての経過報告があり、新編集委員は前年度の理事会で依頼するものであるということが確認された。委員長は5月に予定されている編集委員会で決定し、6月末に発行予定のニュースレターで報告される。

・編集委員とその任期が下記のように確認された。

岩井正浩（神戸大学） 任期3年

（平成17年4月1日～平成20年3月31日）

嶋田由美（和歌山大学） 任期3年

（平成17年4月1日～平成20年3月31日）

小川容子（鳥取大学） 任期2年

（平成17年4月1日～平成19年3月31日）

北山敦康（静岡大学） 任期2年

（平成17年4月1日～平成19年3月31日）

志村洋子（埼玉大学） 任期2年

（平成17年4月1日～平成19年3月31日）

松永洋介（岐阜大学） 任期2年

（平成17年4月1日～平成19年3月31日）

## 9. 新入会員の承認

・新入会員 15 名と特別会員 1 名，賛助会員 1 団体が承認された。2 月 16 日現在の正会員数は 1571 名。

### 新入会員

3208	富田 英也	白鷗大学
3209	中西 紗織	東京芸術大学院生
3210	清水 宏美	福生市立福生第二中学校
3211	十河 治幸	医療法人十全第二病院
3212	高瀬 瑛子	三重大学
3213	長澤 絵里	育英短期大学
3214	三瓶 啓子	横浜国立大学
3215	西沢 久実	兵庫教育大学院生
3216	北澤 隆明	広島大学大学院生
3217	内山 恵子	宮城学院女子大学
3218	遠藤 美奈	(学生会員から正会員へ)
3219	目黒 稚子	会津若松市立日新小学校
3220	伊丹 ゆり	東京都立南花畑養護学校
3221	小西くるみ	東京都立城南養護学校
3222	三木 康子	大阪芸術大学

### 特別会員

D-14 CHAN CHEONG JAN

Universiti Putra Malaysia

### 賛助会員

(株) ユーエイド

## 10. その他

・杉江会計担当理事より，音楽教育事典に係った費用のうち，学会基金から補填分（贈呈分及び原稿料）の残金を一般会計に雑収入として入れるとともに，赤字分（贈呈及び原稿料以外の経費）を一般会計の予備費から支出することの確認があった。

・次回の常任理事会と理事会は，5 月 15 日（日）の午後 2 時から東京芸術大学で開催される予定であることが確認された。また，同日の午前 10 時から編集委員会が開催される。

## 住所・所属変更及び新入会員住所

2004 年度版 No.2 2005 年 2 月 20 日現在

PDF 版ニュースレターでは  
個人情報に関する記事を削除しています

(これ以降のページ番号は目次と異なります)

「音楽教育ゼミナール・イン・妙高 2005 事務局」の  
無責任なチラシ連絡に抗議します

2005 年 1 月 21 日

日本音楽教育学会・北陸地区 会員番号 36 埜上 定

昨年 12 月 25 日付けで学会事務局から学会誌、及び News Letter 第 18 号等が送られて来ました。編集には色々ご苦労があったことと、厚く御礼申しあげます。しかし、その送付用封筒に同封されて送られて来た、標記のチラシによる連絡文書には大きな疑問を感じ、問題として提起させて頂きます。

そのチラシの内容は「事務局の手違いにより、11 月 15 日までに発表を申し込んでいただいた方のデータがすべて消失してしまいました。」(原文通り)と告げ、更に該当する申込者に対して、至急再度メールで申し込むことを依頼しています。

その後、「深くお詫び申しあげます。」(原文通り)とは書かれていますが、通常当然書かれるべき発信人は全然記載されていません。

重大な過失を陳謝する文書では、過失の責任者の名前で、衷心から言葉を尽くして謝るといふ、極めて当然かつ自然な手続きがここで無視されているところに、抑えがたい憤りと、当学会員としての深い憂慮を感ずる者です。

しかも、この過失事件が起こってからこの文書が発送されるまで 50 日の日数があつたこと、またこのゼミナールについては 11 月の全国大会総会で直接参加の呼びか

けがされたことから考えると、この「お詫び」は本来は、同封チラシと言う略式のものでなく、公式な News Letter の記事として連絡すべき事柄と考えます。

百歩譲って、今回の News Letter 編集責任者にこの過失事件の報告がなかったとしても、チラシを同封する段階でその内容と文章を、発行責任者としてチェックする機会があった筈です。

以上の観点から Letter to the Editor としてこの同封チラシ文書に対する抗議書をお送りいたしますので、会長とも御協議の上、何分のご回答をお願い申しあげます。

私は個人的には IT に不信感を持っていますし、このゼミナールにも無関係、責任者名も知りません。しかし、このような無責任な態度を許すことは、真理を探究する学会の運営に著しい汚点を残すことになると感じて、重い筆で連絡させて頂きました。

終りにこの事務局責任者が深く自ら反省し、次回発行の News Letter で無礼・無責任を、全会員に誠心誠意詫びられることを強く要求すると共に、その上で誠実かつ民主的にゼミナールを運営されるように心から希望します。

以上

## 埜上氏の抗議文に対して

日本音楽教育学会事務局長 北山敦康

まずはじめに、会員の埜上氏より日本音楽教育学会の運営に関して重要なご教示をいただきましたことに深く御礼申し上げます。この件に関しまして、会長、副会長と協議し、埜上氏のご要望に従ってニュースレターに取り上げることにいたしました。

ご指摘の音楽教育ゼミナール事務局（実際には「音楽教育ゼミナール実行委員会」と称したほうが誤解が少ないかと思えます）からのチラシですが、これは同氏が指摘しておられるように、発行人（責任者）の氏名と発信の日付が記されておらず、手続き的に不完全かつ不適切なものであることは確かです。

調査いたしましたところ、このチラシが学会事務局に届いたのは、ニュースレター第18号（12月25日発行）を送送する直前の12月20日でした。日程的な条件からも、これをニュースレターに載せることは不可能でしたが、音楽教育ゼミナール

実行委員会としても、必ずしもチラシが「略式」の伝達手段であるとの判断ではなく、会員の皆さまに緊急にお知らせしようという趣旨のものであったのではないかと思います。

しかし、誠に遺憾なことに、事務局長である私は何も報告を受けておらず、このチラシが郵送されてくるまでこうした事態が出来たことを知りませんでした。もちろん、日常的に各種委員会との連絡を密にし、会員に郵送する文書の送信に先立ってはその内容をチェックをするのが事務局長としての務めであることは確かです。これらのことを怠ったのは事務局長である私の責任であり、深く反省しております。

この場をお借りして、すべての会員の皆さまに深くお詫び申し上げます。また、このことは次期事務局長にも申し送り事項として伝え、今後はこのようなことのないようにいたします。

## 妙高ゼミナールの申し込みデータ消失についてのお詫び

平成17年3月1日

妙高ゼミナール実行委員長 伊野義博

妙高ゼミナール事務局長 小川昌文

拝啓 3月とはいえまだまだ厳しい寒さが続いておりますが、会員の皆様におかれましてはますますご健勝のことと存知申し上げます。本年9月9日から11日にかけて開催されます「音楽教育ゼミナール・イン・妙高」につきましては多大なご協力をいただいておりますことを感謝申し上げます。

さて、今回のゼミナールの申し込みは電子メールにてのみの受付という形をとらせていただきましたが、妙高ゼミナール事務局長の小川の記録媒体の不調により11月末頃第一次申し込み分のデータが消失するという事態となりました。本来あってはならないことがおこってしまい、申し込んでいただきました方々に多大なるご迷惑をおかけし

ましたことを深くお詫び申し上げます。また、そのような事態にもかかわらず、快く再度申し込みをいただいた会員の皆様には御礼申し上げます。また、お詫びのチラシにおきまして責任者の名前が欠落しておりましたことに関しましても当ゼミナール事務局の勝手であり、この点についても重ねてお詫び申し上げます。

今回、プログラムの内容もほぼ固まり、ようやくゼミナールの姿が見えてまいりましたが、今後ゼミナールの成功にむけて委員会一同一層努力いたします所存です。皆様のご協力とご理解を改めてお願い申し上げます。なお、現在は、データを厳重に管理しておりますことを付加させていただきます。

敬具

## 妙高ゼミナール9月9日(金)～11日(日)

この秋は、妙高へ！

2005年初秋、スキーと温泉の地「妙高」で音楽教育ゼミナールが開催されます。  
大自然の中の温泉旅館で今後の音楽教育について考えてみませんか？

### 大会テーマ「音楽教育の実践と研究の新たな展望」

○ 興味ある企画が盛りだくさん！！！！

企画の応募ありがとうございました。素敵な企画がたくさん集まりました。文字通り、音楽教育の新たな展望が開けること間違いなしです。以下に、予定される内容の一端を紹介いたします。(企画名は仮題も含んでいます。)

#### 基調講演

- ・ 音楽教育の哲学の本質：Estelle. R. Jorgensen (インディアナ大学)
- ・ アジアにおける音楽教育の展望：Victor Fung (南フロリダ大学)

#### ラウンドテーブル・ワークショップ

- ・ 今外国ではどんな音楽教育が行われているか：Estelle. R. Jorgensen 他
- ・ 素材、木のふれあいをおして育む鑑賞の力：畑山美穂子
- ・ 子どもの声は本当に低くなっているか：小川容子他
- ・ 日本の音楽を教える前に～音楽学からのメッセージ～：澤田篤子他
- ・ 中越地震を乗り越えて～その時音楽教育が果たした役割～：矢鳥昭彦他
- ・ 私の実践、私の哲学：(著名な実践者に語っていただきます)
- ・ 研究と実践の間で：中山裕一郎、山本文茂+北陸地区の音楽教師
- ・ 語り合おう、情報交換しよう、明日の授業のために！  
(教育現場の第一線で活躍する音楽教師が県を越えて大集合)
- ・ 音楽科における日本音楽の導入：江谷和樹
- ・ コンクールと音楽科教育の関わり：日古武
- ・ どう育てるか、保育者の声：奥村正子他
- ・ うたについて：今田匡彦他
- ・ 義太夫節を語ってみよう：長坂由美
- ・ 音と動きの即興アンサンブル：中館栄子
- ・ 佐渡鬼太鼓体験！：佐渡春日鬼組
- ・ 韓国音楽ワークショップ：田中多佳子他
- ・ 「音楽ゲーム」再考、そして体験！：牧野淳子

#### パネルディスカッション

- ・ 音楽教育の研究と実践の新たな展望  
パネリスト：Estelle. R. Jorgensen, Victor Fung, 村尾忠廣  
コーディネーター：坪能由紀子

○ 宿泊は「春秋の宿ホテル大丸」。温泉は、源泉100%、美人の湯。昨今問題となっているお湯の循環もしていません。徒歩1分のところに「赤倉大露天風呂」もあります。宿は、和風のしっとり落ち着いた宿。<http://www.akakura.gr.jp/~akakura16/>

○ 参加費申込は早割(アーリーバード)優待を予定しています。

妙高ゼミナール実行委員会

委員長 伊野義博 [ino@ed.niigata-u.ac.jp](mailto:ino@ed.niigata-u.ac.jp)  
事務局長 小川昌文 [macha0902@vesta.ocn.ne.jp](mailto:macha0902@vesta.ocn.ne.jp)  
<http://myokoseminar.blog.ocn.ne.jp>

## 事務局からのお知らせ

### 1) 平成 17 年度会費納入について

平成 17 年度会費（7,000 円）を同封の振替用紙にて納入してください。本学会は皆様の年会費で運営しております。なるべく早くお振り込みくださいますようお願いいたします。

### 2) 住所・所属等の変更届について

住所、所属などの各種登録内容が変更になった方は、速やかに事務局までご通知ください。葉書やファックスでも構いませんが、転記ミスや資料の散逸を防止する意味でも、できるだけ e-mail でお知らせいただくと助かります。なお、住所変更の際には、会員番号、登録地区、氏名、住所、電話番号、メールアドレス等の登録内容を「新・旧」で併記していただきますようお願いいたします。

また、各種お問い合わせも e-mail でご遠慮なくお寄せください。

e-mail : onkyoiku@remus.dti.ne.jp

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jmes2/index.html>

### \*\*\*\* 編集後記 \*\*\*\*\*

3 年間の理事の任期が 3 月 31 日で終わります。ニュースレターの担当も今回で終わりになり、ほっと安心しているところです。と言っても、ニュースレターのほとんどの細かい編集や作業は北山事務局長がやってくれました。こんなところすみませんが、お礼申し上げます。任意団体である学会の運営は、役員善意と奉仕によって成り立っているといってもよいでしょう。会員の皆様も、自分のために、他人のために、いつかはお互いこうした仕事を分け合っていたらよいと思います。（藤沢章彦）

この 3 年間、総務担当の常任理事として、ウェブページの運営とニュースレターの編集に携わってきました。私が最も苦勞したのはニュースレターのレイアウトでした。文字の大きさや行間・字間を調整しながらの根気のいる作業でしたが、きれいにページに収まったときの喜びは私の完璧願望をくすぐりました。しかし、その最後の仕事が、途中から引き継いだ事務局長としての謝罪文であったというのはなんとも皮肉なものです。何はともあれ、この仕事をこれまでやってこられたのはニュースレターを読んでもくださる方がいらっしやっただけにほかなりません。皆様、ありがとうございました。（北山敦康）

\*\*\*\*\*

【日本音楽教育学会役員（2002-2004 年度）】

会長：村尾忠廣 副会長：平井建二・坪能由紀子

常任理事：北山敦康（事務局長），奥忍・藤沢章彦・筒石賢昭（総務），  
加藤富美子・島崎篤子・丸山忠璋（企画）重嶋博・杉江淑子（会計）

理事：浅井良之（北海道），丸林実千代（東北），伊藤誠・今川恭子・  
小山真紀・阪井恵・山本文茂（関東），伊野義博（北陸），南曜子（東海），  
中原昭哉・竹内俊一（近畿），野波健彦・吉富功修（中国），  
田邊隆（四国），木村次宏（九州）

【事務局住所】〒184-0015 東京都小金井市貫井北町 2-5-22 ハイッシーダ 1-102

【私 書 箱】〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26

Tel/Fax : 042-381-3562 e-mail : onkyoiku@remus.dti.ne.jp

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jmes2/index.html>